

# 19世紀イギリス労働運動における 社会抵抗権とメソジスト ——J. R. スティーブンス牧師を中心に

馬淵 彰

## 序

本稿は、元ウェスレアン・メソジスト牧師であり、かつ、19世紀半ばイギリス労働運動家であったジョセフ・レイナー・スティーブンス(**Joseph Rayner Stephens: 1805–1879**)が労働運動で主張した社会抵抗権にメソジズムの影響が存在したか検討する<sup>1</sup>。

メソジスト派の影響が19世紀イギリス労働運動を穏健な性質なものへと変容させイギリス社会を革命から救ったとアレヴィは論じた<sup>2</sup>。そのアレヴィ・テーゼで提示されたメソジスト派の社会的イメージからすると、スティーブンスはその正反対であるため、主としてメソジスト派の歴史家は労働運動でのスティーブンスの活動とメソジストとの関連性に

<sup>1</sup> 彼は、日本のメソジスト史研究において殆んど紹介されていない。岸田紀、松塚俊三、中村洋子訳、ロバート・F・ウィアマス『宗教と労働者階級：メソジズムとイギリス労働者階級運動 1800–1850』新教出版社、1994年、63頁、214–215頁にスティーブンスへの言及がある。チャーティスト運動の研究では、古賀秀男、岡本充弘、増島宏訳、G・D・H・コール『チャーティストたちの肖像』法政大学出版局、1994年の「第2章ジョウジフ・レイナー・スティーブンス」100–121頁に詳しい説明がある。

<sup>2</sup> E. Halévy, *England in 1815, in A History of the English People in the Nineteenth Century*, Vol. I, 1913, Transl. by Watkin and Barker, (London, 1924), pp.124,425.

についての解釈に苦慮した<sup>3</sup>。労働運動でのスティーブンスの言動について少しでも知識を有す研究者は、彼をメソジスト派の影響を受けた人物として分類することに躊躇する。その大きな理由として二つの点が考えられる。まず一つは、彼が、労働運動の諸集会でイギリス政府などを激しく批判するとともに労働者の武装正当化を唱道したことである。もう一つの点は、労働運動家としての彼の活躍が全国的に知れ渡った時期に、すでに彼がウェスレアン・メソジスト派から離脱していたことである。

そこで、本稿では、まず、(1) 19世紀半ばのスティーブンスの活動がイギリス労働運動でどのような役割を果たしたのかを確認し、次に(2) 武装正当化論を唱導していた時期において彼の労働運動の活動にメソジズムの影響が見られるか再検討する。ちなみに、この二つの間に答えることによって、労働運動へのメソジズムの影響が19世紀前半のイギリス社会の安定化に寄与したというアレヴィのテーゼの問題も具体的に再検討することも可能になる。主な史料は、全国新聞や地方新聞に掲載されたスティーブンスの説教や活動報告のほか、スティーブンスが自ら発行した新聞に掲載された彼の説教や随筆である。

## I. スティーブンス牧師と労働運動

1830年代から1870年代にかけて、スティーブンスはイングランド北部の工業地帯でキリスト教信仰を基にした労働運動を展開した。スティーブンスが北部工業地帯と関わるようになった契機は、1832年にウェスレアン・メソジスト派の年会(**Conference**)が彼をマンチェスター郊外のア

<sup>3</sup> ジョージ・スミス **George Smith** からルパート・デイヴィス **Rupert Davies** までのメソジスト歴史家は、1834年以降のスティーブンスの活動へのメソジスト的影響を否定してきたとエドワーズは指摘する。**Michael S. Edwards, 'The Resignation of Joseph Rayner Stephens', Proceedings of the Wesley Historical Society, vol. XXXVI, (1967–68), p. 16.** エドワード氏からは、1993–4年に個人的にスティーブンス研究上の多くの示唆を与えられた。

シュトン・アンダー・ライン(Ashton under Lyne)の牧師として派遣したことにある。

アシュトン地区は、スティーブンズがそれまで滞在した所と異なる工業地帯であった。1776年に最初の綿織工場が建てられ、1825年までには工場の数は40にまで達した。アシュトンから10マイル四方には100近くの工場が存在し、綿糸紡績業や綿布織業や炭坑業などが栄えた。それゆえ、早くからアシュトンの労働者たちは、ロバート・ピール卿の提唱した労働時間制限への支持を表明しており、1831年には、リチャード・オーストラー(Richard Oastler: 1789-1861)が推進した工場改革組織の設立に影響を受け、ランカシャーで最初の短時間労働委員会(Short-Time Committee)を設置している<sup>4</sup>。

スティーブンズは、アシュトン・アンダー・ラインを拠点にメソジスト派牧師として活動するなかで、彼の教会員でもある工場労働者たちに接し、労働者たちが強いられていた長時間労働や低賃金、工場で多発する事故、不衛生で劣悪な生活環境、過酷な児童労働などの労働問題の目撃者となった。スティーブンズは、労働者救済のための活動に関心を持ち始め、聖書を基礎に社会と宗教の改革を説教壇から語り出し、このような過酷な状況から労働者を救うために尽力した。ただし、スティーブンズは、伝統的階級秩序を尊重するトーリー主義者であったため、既成の社会秩序を尊重する社会改革を提唱し、レッセフェールの自由主義を拒否した<sup>5</sup>。

1836年にイギリスで工場法運動が再燃すると、彼は1月19日に開かれた「ヒンドウレイ(Hindley)」十時間工場法の推進決起大会の議長に選

ばれ、同年3月にはマンチェスターの集会で労働時間短縮に反対する工場主に対して「法的手段をとって抵抗する」ようにと労働者を指導している<sup>6</sup>。

1837年初頭になると、新救貧法の諸条項が北部工業地帯に適用されることへの抵抗運動が北部工業地帯の労働者の間で広まった。それ以前に1795年からイギリス各地に広まったスピーナムランド制度のもとの救貧は、貧困者に対して救済金を支給して生活費を補助する方式がとられていた。つまり、救済を受ける人々が救貧院(Workhouse)への入所を強制されない院外救済である。しかし、1834年に農業地帯に適用された新救貧法では、院内救済の方式が採用された。救済を求め貧困者は、居住地を離れ救貧院に入所しなければならない。その際、男・女それぞれ別の救貧院に入所させられる。新救貧法が北部工業地帯にも適用されることに対して、スティーブンズは、貧しい家庭の夫婦や親子を無理矢理に引き離すとともに、富める者の貧民救済の義務をないがしろするなどの理由から、この新救貧法がキリスト教精神に反すると批判し、新救貧法反対運動の活発な演説者となった。彼によれば、毎日の適度な仕事に見合った適度な賃金で労働者が働き、また、それにより労働者が老後を養うのに十分な蓄えを稼げるよう神は計画された。労働者は、たとえ、仕事が見つからなくても、また、働く体力を失っても生活していけるべきであり、また、死んだとしても、遺された妻は「救貧法のバスターユ(監獄)」に送られるのではなく、親切と十分な支援を与えられるのが望ましいと彼は説く<sup>7</sup>。もちろん、結婚という神聖な夫婦の絆を引き裂くことになるこの新救貧法に反対した人々の中には、社会悪に対して敏感であった一部の国教会聖職者など他の教派に属す教会指導者も存在し

<sup>4</sup> J.T. Ward, 'Revolutionary Tory: The life of Joseph Rayner Stephens of Ashton-Under-Lyne (1805-1879)', Transactions of the Lancashire and Cheshire Antiquarian Society, Vol. LXVIII, (1958), p. 94.

<sup>5</sup> Ibid. pp. 97-98. Michael S. Edwards, Joseph Rayner Stephens, 1805-1879: A lecture delivered at Stamford St. Methodist Church, Ashton-under-Lyne, on July 3<sup>rd</sup>, 1967, Wesley Historical Society, Lancashire & Cheshire Branch, Occasional Publication No. 3, (1968), pp. 7-8.

<sup>6</sup> Ward, opt. cit., p. 96.

<sup>7</sup> これらの発言は、KemnitzとJacquesがNorthern Star, 20<sup>th</sup> Oct. 1837, p.7と17th Nov. 1838, p. 6から引用している。Thomas Milton & Fleurange Jacques, 'J.R. Stephens and the Chartist Movement', International Review of Social History, Vol. XIX, (1974), p. 217.

ていた<sup>8</sup>。しかし、スティーブンズは、その熱意と雄弁さによって北部工業労働者たちの間でより多くの人気を得た<sup>9</sup>。

ところで、スティーブンズの同土オーストラが1837年4月のハダースフィールドの補欠選挙で落選した頃からスティーブンズの活動に暴力容認の発言が見られるようになった<sup>10</sup>。5月のウェストライディングでの新救貧法反対運動の大集会で、スティーブンズは、「この法律を黙って飲み込むよりも、アナーキーの警告の火を灯す」<sup>11</sup>と脅迫的な発言をしている。同年6月になされたウィリアム4世死後の総選挙で、新救貧法問題が北部の選挙区の争点となると、スティーブンズもアシュトンから立候補した。しかし、結果は惨敗であった<sup>12</sup>。その後、彼は脅迫的な発言をも辞さない立場を益々強めていく。例えば、1838年1月1日のニューキャッスルの集会で彼が新救貧法に反対しての次のように発言している。「兄弟たちが低落に屈服する前に、兄弟たちに武装させよう。すべての人は、彼の第一の義務として、良いマスケット銃を手に入れるべきである。もし、金がないなら、これらの必要物を手に入れる手段を獲得するために何かを質に入れさせよう。彼らの貧しさがそれを妨げるなら、良い槍を手に入れさせよう。もし、マスケット銃やピストル、剣、槍が手には入らなければ、婦人にははさみを、子供にはピンか針を持たせよう。もし、すべて駄目なら、その時は、燃え木(**fire-brand**)、しかり、燃え木、私はもう一度繰り返す、燃え木。宮廷(**The palace**)は炎に包まれるだろう。もし、コテッジが夫と妻の住まいとして許されないならば、また、もし、微笑む幼子が父親の腕から、母親の胸から離されなければならないならば」<sup>13</sup>。

<sup>8</sup> Eileen Yeo, 'Christianity in Chartist Struggle 1838–1842', *Past and Present*, no. 91, (1981), p. 111.

<sup>9</sup> Ward, *opt. cit.*, pp. 98–99. Edwards, Joseph Rayner Stephens, p. 9–10.

<sup>10</sup> Ward, *opt. cit.*, p. 99.

<sup>11</sup> *Leeds Mercury*, 20<sup>th</sup> May 1837.

<sup>12</sup> Ward, *opt. cit.*, pp. 99–100. Edwards, Joseph Rayner Stephens, pp. 10–11.

<sup>13</sup> *London Dispatch*, 7<sup>th</sup> January, 1838.

1838年の秋、スティーブンズはオコーナー (F.E. O'Connor: 1794–1855) を通じてチャーティスト運動に加わることになる。1838年という年は、オコーナーが5月3日に急進的な組合を作ってバーミンガムのアトウッド (T. Atwood: 1783–1856) たちの選挙権運動の支援を開始したり、7月にデュズベリの急進主義者たちがラヴェット (W. Lovett: 1800–1877) らの公刊した人民憲章 (**People's Charter**) を採用したりして、急進的な選挙権運動が北部の工場法運動や新救貧法反対運動と結びついた年であった。オコーナーは、この時に北部の新救貧法反対運動と工場法運動で大変に人気のあったスティーブンズをチャーティスト運動に誘った。しかし、スティーブンズは既存の社会秩序内での改革を唱える根からのトーリー的な社会改革者であったため、選挙権の拡大には無関心であった。しかし、最終的には、スティーブンズはチャーティスト運動に参加することに決めるのだが、それは、チャーター獲得のためではなく、新救貧法の北部への導入を阻止し労働者の生活を守り、労働者の生活を向上させるためという自分なりの労働運動の目標を達成するためであった<sup>14</sup>。

彼がチャーティストに加わったことは、選挙権の拡大と議会の改革を本来の目的としていたチャーティスト運動内での武装正当化論争を白熱させることにもつながった。チャーティスト運動に関わり始めた1838年11月のウィガンでスティーブンズは次のように言っている。「私は、イギリスの人々が武器を取り、死に至るまで戦う正当な権利を持っていると主張する。治安判事たちは諸集会を現在、暴動とか反逆を起こす陰謀とか謀反とか、あるいは革命とさえ呼ぶかもしれないが、しかし、これは、全能の神の力と権威によって人々を通じてもたらされた神聖な革命である」<sup>15</sup>。彼のこのような暴力的発言は、普通選挙権運動が緊急な社

<sup>14</sup> Ward, *opt. cit.*, pp. 102–103. Edwards, Joseph Rayner Stephens, p. 12. Kemnitz, *opt. cit.*, pp. 211–213, 216 and 222.

<sup>15</sup> *Wigan Gazette*, 16<sup>th</sup> November, 1838. 体制変革を求めず旧体制維持の考えの彼にとって、考えられる選択肢として武装正当化の唱導であった。彼は自由の身に生まれたイングランド人が武装する合法的権利を有していると確信し

会改善を無視するのではないかと恐れていた北部の改革者の主張と呼応していたが、他方ではチャーティスト運動を支持していたバーミンガムの中産階級を代表とする理性派らとの溝を深めてしまう。オコーナーは当初、バーミンガムの中産階級とスティーブンズとの中間的立場を取り、中産階級の支持を失わないようにと努めた。しかし、最終的には北部で多くの支持を持つスティーブンズの側に立ち、12月半ばから武装正当化論を公然と語り始めた。同年12月27日アシュトンで、スティーブンズは暴言のかどでチャーティストとして最初の逮捕者となる。この逮捕で、スティーブンズはチャーティストから多くの同情を勝ち取り、チャーティストから与えられた1000ポンドの保釈金により二日で釈放された後も、彼は至るところで説教を行うとともに、それらの説教を集めて『ポリティカル・プルピット』紙を発行し、その中で武装正当化論を労働者に説き続けた<sup>16</sup>。実際には、チャーティストの多くは、スティーブンズがチャーティストに対して興味がないことをよく理解せず、彼の武装正当化論を受け入れていったようであるが、スティーブンズの武装正当化論は1839年4月のチャーティストの集会による武装正当性承認に影響を与えたとされる。このように、スティーブンズのチャーティスト運動への参加は、北部工場労働者をチャーティスト運動に導き、チャーティスト内部では理性派と暴力派の対立を激化させ、チャーティストの武装正当化論承認に影響を与え、そして、国内一般における社会的混乱の一因となった<sup>17</sup>。

ところが、スティーブンズとチャーティスト運動の関係は比較的短期間で終わることになる。すでに、1838年12月、彼が逮捕される可能性が高くなった時、スティーブンズはチャーティストの集会に出席しないことを決意していたが、チャーティスト運動とはっきりと決別したのは、

---

ていた。Yeo, opt. cit., p. 113.

<sup>16</sup> Ward, opt. cit., pp. 104–105.

<sup>17</sup> バーミンガム政治同盟(Birmingham Political Union)に代表される中流階級や穏健派労働者と暴力派(急進派)との対立が激化し、1839年のコンベンション以前に運動が分裂してしまう。Kemnitz, opt. cit., p. 214.

1839年8月15日チェスターの巡回裁判で喚問された際である。裁判の場で、彼は労働者に対する新救貧法の弊害を指摘し、その法を推進している政府の悪政を暴き、悪政に対するイギリス人の抵抗権を滔々と語り、裁判官をさえもその雄弁さで感服させている<sup>18</sup>。彼は自説を語る機会となるこの裁判を待ち望んでいたようである。しかし、その答弁で、彼はチャーティストとして活動したことはないと主張した。裁判の席でスティーブンズは、聖職者である自分の目的はキリスト者として社会悪を除くことであって、チャーティストの獲得ではないと強調した<sup>19</sup>。この発言は、スティーブンズの本来の関心をよく理解していなかったチャーティストには裏切り行為に映った<sup>20</sup>。この裁判の結果、彼には十八カ月の投獄とその後五年間の模範的な生活(good behaviour for five years)の義務が言い渡されるのであるが、獄中生活中もスティーブンズは『スティーブンズ・マンズリー・マガジン』を執筆し、自分の目指していた労働運動の説明を試みた<sup>21</sup>。しかし、スティーブンズはこの後二度とチャーティスト運動に加わることはなかった。

彼は1841年2月に釈放され、ステイリブリッジの教会の牧師の仕事に戻り、裁判で命ぜられた五年間の模範的な生活を過ごした後、再び労働運動に加わる。1847年、ランカシャーの雇い主が十時間工場法の改悪を試みたことをきっかけに燃え上がった十時間法遵守運動で、スティーブンズはそのリーダーとなっている。彼は「パンか血か」と迫り、悪質な雇用主への聖戦を宣言し、活発な運動を展開している。その後も彼は、1849年に工場改革を目指す労働者たちによる「フィールデン協会」の結成を援助し、『アシュトン・クロニクル』や『チャンピオン』などの新聞を発行して工場法のために戦い、また、1867年には八時間工場法運動、1872年には工場法改革連合設置を支持した。これらの工場法運動は、労

---

<sup>18</sup> Ibid., p. 219.

<sup>19</sup> Yeo, opt. cit., p. 114.

<sup>20</sup> Ibid., p. 114.

<sup>21</sup> Ward, opt. cit., pp. 110–111.

働者の労働条件の改善に成功し、スティーブンズはその改善に一役果たしたのである<sup>22</sup>。

以上、メソジストの年会によってイングランド北部工業地帯に派遣された**1830**年代から彼の晩年の**1870**年代に至るまで、スティーブンズが労働運動に関わったことを確認してきた。そして、特に、アレヴィ・テーゼによればメソジズムがイギリス社会の安定化に寄与したとする**1836**年から**1841**年の時期には、スティーブンズは反対に十時間工場法運動、新救貧法反対運動の推進者となり、武装正当化論を展開し、オコーナーを通じてチャーティスト運動に加わったことで、チャーティスト運動内部の武装正当化論の激化を助長し、国内的には社会的反乱の醸成に寄与したこともわかった。

## II. スティーブンズ牧師とメソジズム

さて、次に、労働運動で活動していたスティーブンズの活動にメソジズムの影響があったかどうかを明らかにしてみたい。ここでは、最初にスティーブンズとウェスレアン・メソジズム組織との関係に触れ、続いてメソジズムに対するスティーブンズの発言を考察する。

**1834**年にウェスレアン・メソジスト教会を脱退するまで、スティーブンズ牧師はメソジスト教会と深い関係を持っていた。スティーブンズは**1805**年、エジンバラでメソジストの厳格な牧師家庭に生まれた。彼の父ジョン・スティーブンズ(**1772**–**1841**)は、**1827**年のウェスレアン・メソジストの年会議長になった指導的人物である。スティーブンズはメソジストの学校に行く機会を得た。マンチェスター・グラマー・スクールに通い始める前に、スティーブンズは父の勧めで八才の時からウッドハウス・グローブにあるメソジストの新しい寄宿学校に入り、そこで**1813**年から**1815**年にかけて二年間学んでいる。聖職者としての彼の経歴は、二十歳になった時、ウェスレアン・メソジストのブリストルの年会が彼を

ハル地区の見習い説教者に任命した時から始まる。その後、彼はウェスレアン・メソジストの最初のスウェーデン宣教師としてストックホルムで三年間活動し、次に、正式な聖職者としてチェルトナムのサーキットとニューカッスル・オン・タインのサーキットでそれぞれ一年間働いた。**1832**年からはイングランド北部工業地帯のマンチェスター郊外のアシュトン・アンダー・ラインの牧師として派遣された<sup>23</sup>。

しかし、スティーブンズはウェスレアン・メソジストの組織から離脱する。それは、アシュトン・アンダー・ラインで牧師として働き始めてから二年が過ぎた**1834**年のことであった。彼の脱会の原因は、彼がその少し前から政教分離を自分の教会で説き始め、**1834**年**1**月にアシュトン政教分離協会(Ashton Church Separation Society)の書記になったことにある<sup>24</sup>。この年の**7**月**30**日に開かれたウェスレアン・メソジスト派のロンドンでの年会は、スティーブンズが主張した政教分離論を取り上げ、彼が政教分離協会の書記になったことの正否を丸二日間も協議することになった<sup>25</sup>。この年会でスティーブンズは、自分がメソジズムの創設者ジョン・ウェスレーの教えに沿って政教分離を主張していると弁明し、スティーブンズの父ジョンも「私の息子は、(政教分離以外の)ほかの事柄においては非常に従順である」<sup>26</sup>と弁護している。しかし、年会は、平和を好み、かつ、非分派的なウェスレアン精神に反するという理由でスティーブンズの活動を非難し、彼に一年の停職を求めた。ところが、妥協を好まないスティーブンズはウェスレアン・メソジストの聖職を辞職することを選んだ。このように、彼の脱退理由は彼の労働運動への関与でもなく、まして彼の武装正当化論でもない<sup>27</sup>。彼は政教分離問題以外ではメソジスト派の教えと抵触していなかった<sup>28</sup>。

<sup>23</sup> Edwards, Joseph Rayner Stephens, pp. 1–4. Ward, opt. cit., pp. 93–94.

<sup>24</sup> Edwards, Joseph Rayner Stephens, p. 4.

<sup>25</sup> 年会 Conference の議事録が B. Gregory, Side Lights on the Conflicts of Methodism, (London, 1899), pp. 150–165 にある。

<sup>26</sup> Ibid., p. 164.

<sup>27</sup> スティーブンズの離脱が労働者への同情と無関係であったことについてはエ

<sup>22</sup> Ibid., pp. 112–116.

当地の労働者の境遇にたいして真摯な態度の彼に惹かれてか、多くの教会員がスティーブンズとともにウェスレアン・メソジスト教会を離れ、スティーブンズに付き従った。この時、700人ほどのウェスレアン・メソジストの労働者が当時二十九才の若いスティーブンズに従ってウェスレアン・メソジストを脱会した。彼らはアシュトンとステイリブリッジの独立した教会の牧師としての彼を支援してスティーブンズ一派を形成した。このスティーブンズ一派は急成長し、1839年には、10の説教区 (preaching station) と 31人の説教者をアシュトン・サーキットだけで有しており<sup>29</sup>、さらに、1843年には、127人の日曜学校教師と520人の聖書朗読師(Readers in Scriptures)と790人の日曜学校生徒(Sunday scholars)を擁するほどになった<sup>30</sup>。スティーブンズは、ウェスレアン・メソジストから辞職した後、二度とウェスレアン・メソジストの牧師に戻ることなく、他の教会から独立したこのスティーブンズ一派の牧師の職に留まり続けた。

このように彼がメソジストの家庭に育ち、メソジストの教育を受け、メソジストの見習い説教者、宣教師、牧師を務めたことや、彼が辞職する時点でも自分がウェスレーの教えに従っていると弁明したこと、父親のジョンが政教分離問題以外では息子が非常に従順だと弁護したことなどから、スティーブンズのキリスト教信仰がメソジズムを土台に形成されたと言える。しかし、この後、スティーブンズがウェスレアンから脱会して労働運動を展開していた時の、スティーブンズとメソジズムが実際にどのように関係わりあったか確かめるには、労働運動家としての活

---

ドワーズが詳しく分析している。Edwards, 'The Resignation', pp. 16 and 18.

F.H.A. Micklewright, 'Joseph Rayner Stephens: A Reassessment', London Quarterly and Holborn Review, Vol. CLXIII, (1943), pp. 53-54.

<sup>28</sup> 後に彼は国教会擁護派へと転向する。D.A. Johnson, 'Between Evangelicalism and a Social Gospel: The case of Joseph Rayner Stephens', Church History, Vol. XLII, (1973), p. 230.

<sup>29</sup> Yeo, opt. cit., p. 115.

<sup>30</sup> Ward, opt. cit., p. 95. Edwards, Joseph Rayner Stephens, pp. 6-7.

動中にメソジズムに関して語ったスティーブンズの発言を考察する必要がある。

メソジズムに触れた彼の発言は、1839年に発行の隔週新聞『ポリティカル・プルピット』に七回と、1840年からの投獄生活中に発行した月刊誌『スティーブンズ・マンスリー・マガジン』に二回記録されている。ここでは、それらの発言の中で、特に労働運動とメソジズムの関係に触れた発言を取り上げる。また、メソジズムについての発言は、当時のメソジストに対してのものと、メソジズムの創設者に対してのもの二つに分けて考察した方が理解し易いように思われるので、まず、最初に、当時のメソジストに対しての彼の発言から考察し、次にメソジズムの創設者に対しての彼の発言を考察する。

1839年2月10日のステイリブリッジでの説教で彼は次のように語っている。「織機や紡績機や炭坑での我々のあらゆる労苦にもかかわらず、我々自身の子供達の空腹を満たせない時、何が為され得るか。時が来る。神の子供達、そして、あなた方はすべて神の子供達である。これが、礼拝所の直中で半ダースのメソジストの偽善者たちを神に子達に、残りすべての者を悪魔の子達に仕立てあげていくこの国の人々に仕掛けられているもう一つの悪魔の策略である。この半ダースの者は工場や店で強奪し、嘘をつき、そして騙し続けている。その一方で、工場労働者は皆悪魔の子達である」<sup>31</sup>。ここでは、スティーブンズは、工場主や雇用主、商店主など裕福なメソジスト会員が神の子とされ、他方、労働者など貧困に喘ぎ政府に抵抗するメソジスト会員たちを悪魔の子とするメソジスト指導層の態度を責めていると考えられる。この説教で彼は、工場主や雇用主、商店主など中産階級に肩入れするメソジスト指導者たちを「罪深い者」であり「泥棒」だと叱責している。

同年3月3日のアシュトン・アンダー・ラインでの説教でも、次のように語っている。「メソジストの義認と聖書の義認とは別物である。義

---

<sup>31</sup> Political Pulpit No. 1, A Sermon Delivered at Staley-Bridge, on Sunday Evening, Feb. 10<sup>th</sup>, 1839, p. 8.

化されることは、位置を正されることである。我々と神との間、神と我々の間、我々と隣人との間、そして隣人と我々との間がすべて正されることである。もし、これが義認の意味であり、また、あなたがた自身の牧師たちもこれが義認の意味であることを否定しないならば、牧師達にこの義認を突きつけて、彼らの集会の中にいるどの工場主も信仰によって義認され得るかどうか問いかけてみよ」<sup>32</sup>。ここでスティーブズは、義認された者の正しい在り方を工場主に要求しないメソジスト牧師達を非難している。神に罪赦されたものが神との関係を正し、神の造った隣人をも愛し関係を修復していくのなら、なぜ、工場主や商店主などの中産階級は労働者たちとの関係を正しくしていかないのかと。貧しい人々を、その貧しさのゆえに、社会の悪人のように救貧院へ送り込むような法案を通すことが、聖書の義認から出てくる正しい在り方なのかと。

3月3日のこの説教では、スティーブズは、工場主などのメソジスト富裕者の例を幾つか挙げ、彼らの不純な信仰を誹謗している。その一つの例で次のように述べています。「ランカシャーの最も大きな工場の工場主の一人であり、ウェスレアン支配者層の最初の中心人物の一人であり、ウェスレアンのあらゆる基金への最も際だった寄贈者の一人である人物を私は知っている。そして、その人物は彼の会計事務所で、嘘が罪と呼ばれることは非常に残念なことだ、嘘はビジネスにおいて必要であり、非常に有用なものであると断言した」<sup>33</sup>。ここでは、心の聖化よりもビジネスのことに心を引かれ、モラルが低下しているメソジスト工場主の例を挙げている。また、同年6月9日の説教ではスティーブズは一人のウェスレアン・メソジスト信徒についての興味深い話を語っている。このメソジスト信徒は、スティーブズの説明によると、権力者は神によって立てられているのだから、例えそれが暴政や圧制や不正や悪であっても、そのどんな命令に対してもクリスチャンの義務は従順と服従と黙認と忍耐とあきらめであると従来考えていたという。ところ

が、彼はスティーブズの主張に共鳴し、心を入れ換えたというのである。スティーブズはこの信徒が「今、年会の解釈が反クリスチャン的で忌まわしい解釈であることに気付きました」と喜んだと語っている。スティーブズは、権威への絶対的服従を教えているウェスレアン・メソジスト年會を非難し、年會を「目の見えない道案内人」<sup>34</sup>と攻撃している。

スティーブズは、労働者の信徒の目を現実の問題から来世の救いに向けさせ、どんな悪政や不正を行っていても権力者は神が立てたものであるから彼らの命令には絶対に服従し、さもなければあきらめることがクリスチャンの義務であると労働者に教え、それらの労働者を不正に扱う工場主や雇用主、商店主など無慈悲な中産階級の信徒に対しては何も責めずにいるメソジスト牧師や年會の服従的な政治態度を責めた<sup>35</sup>。

彼のこのような発言の理由は、ウェスレーの死後、1790年代の政治不安や1812年の非国教徒の法的承認問題、1820年代からの国家の学校教育政策などの国政への対応から服従的な政治態度の慣習を形成したメソジスト指導層にあった。また、当時は、ヨーロッパは保守反動的なウィーン体制の時代であり、イギリス政府も革命や暴動への警戒心は緩めていなかった。全国的組織を有するメソジスト教会が会員の反政府的主張を容認すれば、その社会的影響は計り知れない。もし、メソジスト派が会員の反政府的主張を容認したならば、当然、政府は教会活動に介入してくるであろう。これらの社会背景により、ウェスレアン・メソジスト派の指導者たちは政府に服従するよう会員を指導していた。現状(status quo)を容認し肯定する政治的中立は、ウェスレアン・メソジスト派指導者 J.バンティング(J. Bunting: 1772–1858)に代表される立場であった<sup>36</sup>。

<sup>33</sup> Ibid., p. 23.

<sup>34</sup> Political Pulpit No. 11, A Sermon Delivered at Ashton-under-Lyne, on Sunday Evening, June 9<sup>th</sup> 1839, p. 82.

<sup>35</sup> W. David Lewis, 'Three Religious Orators and the Chartist Movement', Quarterly Journal of Speech, XLII, (1957), p. 63.

<sup>36</sup> Micklewright, opt. cit., p. 58.

<sup>32</sup> Political Pulpit: Sermon IV. Delivered at Ashton-Under-Lyne, on Sunday Afternoon, March 3, in the Market place, 1839, p. 22.

しかし、1838年10月にカーライルでのスティーブンスの次の発言、「良くても悪くてもすべての法に従うべきだという法に反する考えに人々を教え込むことは単なるペテンである。この原理は、反政治的で反社会的であり、そして反クリスチャン的である」<sup>37</sup>という表現は、彼がメソジストの牧師や年会の慣習化された政治上の保守的態度を攻撃したものとされる。彼は、「宗教の無い政治は死んでおり、一方は身体で他方は魂である」<sup>38</sup>と叫んだ。

さて、次に、メソジズムの創設者に対するスティーブンスの発言を考察する。メソジズムの創設者に対する彼の発言は当時のメソジスト牧師と年会を非難していた同じ年の1839年5月12日にロンドンで語った説教に現れている。彼は、その説教の冒頭でメソジズムの創設者であるウェスレー(John Wesley: 1703–1791)やホイットフィールド(G. Whitefield: 1714–1770)を「イギリスと世界がかつて見た最も偉大で最良な人物」と賞賛している。そして、ウェスレーやホイットフィールドを称える理由として、彼らが大衆の声を取り上げながら「人の機嫌とりをせず、人の不機嫌を恐れずに神のすべての目的を宣言した」からだと説明している。ウェスレーらへのこれらの賞賛は、産業資本家や工場主、商店主などの機嫌をうかがっているとスティーブンスの目に写っていた当時のメソジストの年会や牧師たちの態度への非難と比べると、対照的である。スティーブンスは、彼の説教を聞いている聴衆がこのウェスレー牧師らと「同じ精神を示し、同じ印を彼らの前に付け、同じ目的を心に留める」ように祈り、願っていると述べ、ウェスレーらの「精神を説教することが私の目標であり目的である」<sup>39</sup>とまで明言した。チャーティスト運動で武装正当化論を説いていたスティーブンスには、自分こそメソジストの創立者の精神に沿った行動をとっているという認識があった。

ウェスレーへの言及は、彼の労働運動への単なる自己正当化ではない。この主張にこそ、労働運動での彼の言動の本質を解く鍵がある。労働運動においてスティーブンスの最大の関心事は、常に「心の革新」や「社会的聖化」の問題であった。彼が目指していたものは、政治改革者や社会改革者が掲げる世俗的目標ではなく、牧師などが追及する宗教的な目標であった。その姿勢は、彼の当時の発言に明確に表れている。1838年9月のマンチェスターのチャーティストの大会で彼は「普通選挙権の問題は、全く、ナイフとフォークの問題であり、パンとチーズの問題である」<sup>40</sup>と述べ、11月のウィガン(Wigan)の集会でも「私が、普通選挙をどうしたいと思うか。私にとってこの問題はどうでもいい。私は一度もそれを考えたことがない」<sup>41</sup>と語っている。選挙権の拡大は彼の追求している目標ではない。彼は、参政権の拡大は、心の変革へとはつながらず、つまり、工場主や商店主などの心を入れ替えることはできないと考えていたのである。翌1839年2月17日ランカシャーのハイド(Hyde)の説教でも彼は次のように言っている。「イギリスはクリスチャン改革者を必要としている。今までに多すぎたのは、いわゆる政治改革である。人々を変えられた人々でなければ、イギリスのすべての法は少しもハイドを良くすることはできないであろう。イギリスのどの法もこれらの邪悪な人々の心を変えることができない。専制的支配者たちの心と、あなたがたの心を変えられなければ、法に何ができよう」<sup>42</sup>。彼は人々の心の変革がなければ、たとえ普通選挙を獲得したとしても社会悪の解決につながるわけではないと主張し続けた。チャーティスト運動に加わっても、彼が常に追求したのは、心を入れ換えたキリスト者を立ち上げさせ、人々の道徳を向上させることによって労働者の生活状況を改善することであった。

<sup>37</sup> Northern Star, 27<sup>th</sup> October, 1838.

<sup>38</sup> Johnson, opt. cit., p. 231.

<sup>39</sup> Political Pulpit: Sermon III, Delivered on Kennington Common, London, on Sunday, May 12<sup>th</sup>, 1839, at 7 o'Clock in the Evening, 1839, pp.55–56.

<sup>40</sup> Northern Star, 29<sup>th</sup> September 1838. Ward, p. 103.

<sup>41</sup> Wigan Gazette, 16<sup>th</sup> November, 1838.

<sup>42</sup> Political Pulpit: A Sermon Delivered at Hyde, in Lancashire, on Sunday Evening, February 17<sup>th</sup> 1839, pp. 11–12.

前述のように、彼の武装正当化論の目的は、北部への新救貧法導入を政府に思いとどまらせることにあった<sup>43</sup>。彼は、目前に迫った新救貧法導入を阻止し、北部労働者たちの家庭破壊を防ぐことを急務としなければならなかった<sup>44</sup>。しかし、フランス革命のような政治・社会体制変革を求めないトーリー的立場のステューブズは、新救貧法導入問題の解決のために、現体制下の為政者たちの心の変革を即座に引き出す方法を模索した。その彼には、神に選ばれた一牧師としてイギリス社会のあらゆる階層の人々の心の問題に対する責任があるとの自覚があった<sup>45</sup>。それゆえに、彼は、旧約聖書の預言者のように、神から迫り来る災いを説き、道徳的な社会秩序へ即時に立ち返ることを人々に要求したのである。彼は、「悔い改めよ。そうでなければ、神の裁きが下る」という悔い改めの説教を「心を入れ替えろ。そうでなければ、暴動や革命が起こる」と工場主や商店主、自由放任主義の自由主義者たちなどにメッセージをおくり、彼らに恐怖心を持たせ、瞬時的な心の変革を求めた<sup>46</sup>。他方、労働者に対しては、たとえ使用しなくとも、武器を家の戸口に掛けておくこと自体に自由民 **freeman** としての威厳の印があるとステューブズは説いた<sup>47</sup>。彼の手法は、実際、工場主や自由主義者を恐怖に陥れることに成功している<sup>48</sup>。革命や武装正当化などを伴うステューブズの活動は「悪法への抵抗」であり、悪法に対するイギリス人の抵抗権の正当性の主張であったが<sup>49</sup>、同時に、悔い改めを促す福音的説教の延長でもあった。心の問題に焦点を当て、イギリスの社会的悪（罪）との対決に一牧師として取り組んだと彼の言動を解することができる。この点で、武装正当化論を掲げた彼の同労者オコーナーとはまったく異なる。オコーナーは、ステューブズと違いクリスチャンとして社会悪を取り除くた

<sup>43</sup> Kemnitz, opt. cit., p. 219.

<sup>44</sup> Ibid., p. 219.

<sup>45</sup> Johnson, opt. cit., p. 233.

<sup>46</sup> Micklewright, opt. cit., p. 56.

<sup>47</sup> Kemnitz, opt. cit., pp. 219–220.

<sup>48</sup> Ibid., p. 213.

めというよりも、むしろ、議会でチャーターを認めさせる手段として武装正当化論を説いたに過ぎない。

ステューブズが労働運動において常に心の変革を目指していたという点に限って考えるならば、彼自身の心の中には、ウェスレーとの繋がりが存在していたのであろう<sup>50</sup>。晩年のステューブズがウッドハウス・グローブの母校で行った演説がメソジストから受け入れられたことや、**20**世紀に入ってメソジスト派によって彼がメソジストにおけるキリスト教社会主義者(**Christian Socialist**)の先駆者と評価されている<sup>51</sup>ことなどから、辞職した後にも彼がメソジズムの影響のもとに活動を続けたと推測できる。

ウェスレーがステューブズの時代にいたとしても武装正当化論を説くことはしなかったかもしれない。しかし、ステューブズにしても、暴動や革命という言葉を用いていたが、実際にそれらを引き起こそうと考えていたわけではない。その一つの証拠に、彼の説教や演説には暴動や革命遂行後の社会体制についての具体的計画が示されていない。また、彼は、**1839**年**5**月**12**日の演説では、「私は革命を憎む。……我々がイングランドでそれを見ることがないように私は神に祈る。……暴力による革命は神の目の前に罪深いものである」<sup>52</sup>とも語っている。

## 結論

<sup>49</sup> Ibid., p. 225.

<sup>50</sup> Micklewright は、「自由放任主義の政策は罪深く、また、その支持者たちは悔い改めに導かれなければならないとのメソジズムから引き出された確信によって、彼（ステューブズ）は駆り立てられていた。彼はメソジズムにおいて立ち上がってくるある精神の一つの重要な実例である」と論じる。Micklewright, opt. cit., p. 51.

<sup>51</sup> Edwards, Joseph Rayner Stephens, p. 14. エドワーズはステューブズについて「キリスト教社会主義のメサイアではなかったが洗礼者ヨハネであった」と評している。Edwards, Joseph Rayner Stephens, p. 20.

<sup>52</sup> Political Pulpit: A Sermon Delivered in Shepherd and Shepherdess Fields, Islington, London, on Sunday Morning, May 12<sup>th</sup>, 1839, p. 47.

以上、労働運動の活動家としても知られている元ウェスレアン・メソジスト牧師スティーブズが、労働運動でどのような役割を果たしたのか、また、彼の労働運動家としての活動にメソジズムの影響が存在していたのかどうか探ってきた。その結果、次のことが分かった。スティーブズは、チャーティスト内部で武装正当化論を主張し、イギリス国内に不穏な状況を作り出すのに寄与した。ウェスレーが武装正当化論を唱導していなかったことからすれば、スティーブズの社会抵抗権の主張はメソジズムとは無関係と考えられる。しかし、スティーブズは明らかにウェスレーの真の弟子としての確信をもって活動していた。終始、彼の目標は「心の革新」や「社会的聖化」にあり、この点に焦点をあてるならば、彼の社会抵抗権の主張がメソジズムと無関係であったとは断定できない。

スティーブズの言動にウェスレーらのメソジズムの影響があったと考えるならば、メソジズムが、かつてアレヴィの指摘したようなイギリス社会の安定化への寄与ではなく、逆に国内一般に社会的反乱を醸成する一因となっていたと言える。アレヴィ・テーゼ肯定派は、穏健な労働運動指導者に対してはメソジストの影響を認めるが、スティーブズのような暴力擁護派の指導者には、たとえ、メソジストの影響が考えられてもそれを評価しない<sup>53</sup>。しかし、アレヴィ・テーゼに代表されるメソジスト派のイメージにそぐわないスティーブズのような存在は、実際の歴史を垣間見たとき、数多く存在する。メソジストについての特定の視点によって制約された一般化（枠組み）を用いた分析では、メソジスト派の社会的影響の広さや深さを十分には説明できない<sup>54</sup>。スティーブズの事例は、その好例である。

---

<sup>53</sup> Kemnitz は、スティーブズの雄弁さに聖職者としての宗教的要素を読み取っている。Kemnitz, opt. cit., p. 223.

<sup>54</sup> そもそも、メソジストとは何かという定義自体が難しい。ジョン・ウェスレーの弟チャールズでさえ、信徒説教者や国教会への姿勢、聖化の解釈などでジョンと意見を異にしている。誰がジョン・ウェスレーの教えを引き継ぎ、何がメソ

ウェスレーは共和政に最後まで賛成しなかった。ウェスレーと共和政（あるいは民主政）との間には超えなければならない溝がある。普通選挙を平和的に追求した理性派チャーティストであってさえ（あるいは、労働運動を形成し労働争議などを展開することでさえ）、厳密にはウェスレーに従っていたとは言えない。しかし、アレヴィ・テーゼ肯定派は穏健な方法で参政権拡大を要求した 19 世紀の政治改革者にはメソジスト派の影響を認める。他方、ウェスレーとスティーブズ牧師の武装正当化論との間にも超えなければならない溝がある。しかし、アレヴィ・テーゼ肯定派はこの溝は軽視できず、スティーブズに見られるメソジスト派の影響の評価や分析には消極的となる。アレヴィ・テーゼで提示されたメソジスト像を堅持する時、我々は実際の歴史から多くのものを切り捨てていかなければならなくなる。アレヴィ・テーゼの呪縛によって、我々はメソジスト派の社会的影響を特定な狭い領域だけに限定してきてしまったのではないだろうか。

(日本大学法学部専任講師)

---

ジスト派の影響かを峻別することの困難さに歴史家は常に直面する。